

## 序章 イスラーム急進派をめぐる政治地理学的変化 ——中東・北アフリカ・サハラ地域が直面するあらたな テロリズム

私市 正年

### はじめに

「アラブの春」が遠くかすんでしまったように見える。それほど「イスラーム国」の衝撃は大きい。しかし、2011年の「アラブの春」はアラブ・イスラーム諸国の将来に希望の火をともし、それまでこの地域ではほとんど語られることのなかった自由・平等・尊厳などといった言葉が共通の価値とされた点で、「アラブの春」の衝撃もきわめて大きいものであった。では、「アラブの春」と「イスラーム国」はいかなる関係にあるのか。二つの問題はつながりがあり、イスラーム世界で起こっている大きな変動の波を示す事件ではないのか。本論では、このような視点から中東・北アフリカ・サハラ地域について、二つの問題の関連性と、その間に起っていたイスラーム急進派の政治地理学的変化を検討する。

### 1. ジハードを唯一の大義とする「ジハード主義者」

「宗教を政治的イデオロギーとする政治運動」をイスラーム主義運動とするならば、「イスラーム国」のジハーディストたちはこの範疇には入らない。彼らはジハードだけを唯一の大義として闘っているのであり、「イスラーム国」はもはや政治的イデオロギーというよりも、巨大な空想といえる<sup>1</sup>。

では「イスラーム国」とアル・カーイダはどのように違うのか。ビンラーデンに率いられたアル・カーイダは脱領域化し、想像の共同体をめざしていった。その戦いの頂点が2011年9月11日のアメリカ同時多発テロであった。しかし、「9・11」テロ事件、マドリードのテロ事件（2004年3月11日）、ロンドンのテロ事件（2005年7月7日）後、アル・カーイダは戦術的な展望を開けずにいた。それはアル・カーイダの「想像の共同体」を志向する戦いの限界を示していたのであり、その行き詰まりは2011年のビンラーデンの死によって決定的になった。そのため、ジハーディストたちは再び地域に戻ってきた。各地からやってくる義勇兵たちが、結婚によって土地に根を下ろすのはそのためである。こうしてジハーディストたちがシリアやイラクで活動するようになった。

「イスラーム国」は直接的には2003年のアメリカ軍のイラク侵攻の産物といえる。アメリカはイラクを民主化する目的で侵攻したが、結果的にシーア派に権力を与えたため、

スンナ派は周辺に追いやられた。そのことがのちにバグダーディー Abu Bakr al-Baghdadi にカリフ国を宣言させることになる。

ジハーディストの多くは、ムスリム世界で周辺化された者や、疎外された者、あるいは欧米の新たな改宗者たちである。ジハーディストたちはこれまで個人単位であったが、「イスラーム国」のジハーディストの中には家族単位で参加している者もいるし、現地で結婚する者もいる。これは新しい現象であり、「ジハードの家族化」といえるだろう<sup>2</sup>。別の点で興味深いのは、ジハーディストの 20%~25%が改宗者(彼らは完璧に英語やフランス語を話す。)であることである。そこには、欧米のムスリム社会が抱えている問題が反映されている。

## 2. アル・カーイダから「イスラーム国」へ

### (1) イラク戦争とアル・カーイダの衰退の始まり

「イスラーム国」の台頭はアル・カーイダの圧倒的な影響力と権威が失墜したことと関係している。1979 年のソ連軍のアフガニスタン侵攻に対し、多数のムスリム義勇兵がムジャーヒディーンとしてアフガニスタンに参集した。その一人、オサマ・ビンラーデンが 1984 年ペシャーワルに建設したゲスト・ハウス「バイトゥル・アンサール」がアル・カーイダの始まりである。それは 1988 年にアル・カーイダと呼ばれるようになり、単なるゲスト・ハウスではなく、軍事訓練施設をも兼ねるようになった<sup>3</sup>。

1989 年、ソ連軍がアフガニスタンから撤退すると、義勇兵たちの多くがアフガニスタンから出身国へと帰ったが、1990 年のイラクのクウェート侵攻とともに、アメリカ軍という新たな標的が現れた。アメリカ軍のサウジアラビア駐留は、イスラームの聖戦をかかげるジハーディストたちにとってみれば、イスラームの聖地を汚す許されぬ冒涇だからである。かくして、2001 年 9 月 11 日、アル・カーイダによる同時多発テロが勃発した。それに対し、アメリカ軍は首謀者ビンラーデンが潜伏するとされたアフガニスタンへの攻撃を開始し、その結果ターリバーン Taliban 政権が崩壊した。

しかしアメリカ軍の真の狙いはイラクのフセイン体制の打倒であった。アメリカ軍を主体とする有志連合軍は、突如、2003 年 3 月、「イラクが大量破壊兵器を所有しているのは国連への虚偽違反である」との理由でイラクへの攻撃を始めた。いわゆるイラク戦争(2003-2011)の勃発である。4 月 7 日、バグダードが占領され、ついに 12 月 13 日、サッダーム・フセインが拘束された。そして、2005 年 1 月、占領政府(CPA)下で国民議会選挙が実施された。

さらに 10 月 25 日、シーア派とクルド人の参加による国民投票で新憲法が承認された(投票は 10 月 15 日)。スンナ派は意見が分裂したため選挙戦に大きく出遅れてしまった。12

月 15 日 国民議会選挙ではスンナ派が選挙をボイコットしたため、シーア派が圧勝した。かくして 2006 年 4 月、シーア派系議員連合「統一イラク同盟」は、首相にヌーリー・マリーキーを選出し、シーア派中心の政権を発足させた。こうして、スンナ派とシーア派の対立という宗派紛争の色合いが強まり、スンナ派は、シーア派政権をアメリカ軍と同じように、「異教徒」による支配として敵視するようになった。宗派对立を問題にしてこなかったアル・カーイダの潮流とは異なる潮流（スンナ派勢力）が現れてきた。

## （2）ジハード主義と「イスラーム国」の出現

アル・カーイダのイラク支部（2004 年 10 月結成）リーダーのザルカーウィーは、シーア派を不信仰者（カーフィル）とみなし、シーア派をジハードの対象とみなした。一方で、アメリカ軍のイラク占領が長期化するにつれ、アル・カーイダ（本体）（ビンラーデンの指揮）は、ザルカーウィーの残虐性とシーア派ムスリムに対する攻撃に対して、ザルカーウィーを批判した。かくしてアル・カーイダのイラク支部はアル・カーイダ（本体）からの離脱を志向するようになった。

2006 年、アル・カーイダのイラク支部が他の武装組織と連合し、「イラク・ムジャーヒディーン諮問評議会」を組織した。その指導者にアブー・オマル・バグダーディーが就任した。同年 8 月、アル・カーイダのイラク支部代表のザルカーウィーがアメリカ軍の攻撃により死亡すると、アル・カーイダのイラク支部（「イラク・ムジャーヒディーン諮問評議会」）のアル・カーイダ（本体）からの離脱は決定的となり、自らの名称をイラク・イスラーム国と変更した。そして 2010 年、アブー・オマル・バグダーディーがアメリカ軍の攻撃で死亡すると、アブー・バクル・バグダーディーがイラク・イスラーム国の指導者に就任した。

2013 年 4 月 アブー・バクル・バグダーディーが、シリアのヌスラ戦線はイラク・イスラーム国の下部組織であり、今後はヌスラ戦線と合併して組織を「イラクのイスラーム国」から「イラクとシャームのイスラーム国」（略称：ISIS）へと改称する、と宣言した。

2014 年 6 月 29、ISIS は、同組織のバグダーディーが「カリフ」であり、あらゆる場所のイスラーム教徒の指導者であるとし、イスラーム国家であるカリフ統治領をシリア・イラク両国の ISIS 制圧地域に樹立すると宣言した。また同声明において組織名からイラクとレバントを削除し、「イスラーム国 al-dawla al-islamiya (IS : Islamic State)」と改称した。

### (3) 地域に帰ってきたジハードистと「イスラーム国」

2001年「9・11」アメリカ同時多発テロで衝撃的な成果をあげた後、マドリード（2004年）、ロンドン（2005年）でのテロと闘争を継続したが、その後大きなテロを起こせず、アル・カーイダ（本体）のグローバル・テロリズム戦略（イデオロギー）は、先細りであった。とくに、2011年5月2日、アル・カーイダの指導者、ビンラーデンが殺害されると、アイマン・ザワーヒリーが後継者となったが、ビンラーデンのようなカリスマ性をもっていなかったため、アル・カーイダ（本体）の求心力が急速に失われていった。

これに対し、ローカルな戦いを行うグループは、グローバルな戦いを主張するアル・カーイダ（本体）と徐々にずれを感じるようになった。イラクのアル・カーイダ支部のバグダーディーもその一つで、アル・カーイダ（本体）と縁を切った（2013年の声明）のはそのためと考えられる。

アル・カーイダ（本体）が相変わらず、脱領域的、グローバル・テロを志向しているのに対し、各地域で活動を行っているアル・カーイダの支部、すなわち AQMI（マグリブ・イスラームのアル・カーイダ）、AQAP（アラビア半島のアル・カーイダ。2009年頃設立）、シャバーブ al-Shabab（ソマリアのアル・カーイダ）などが、グローバル・ジハードというよりも、一定の領域を拠点としつつ、ローカルなジハードを展開して、成果をあげていった。2013年1月16日、アルジェリア・サハラ砂漠における AQMI によるイナメナス・テロ事件（日本人10人を含む39人が犠牲）もその具体的な例といえる。AQMI は、サハラ・サヘル地域を拠点にしてテロ・誘拐・麻薬や武器の密売などで大きな利益をあげ、地域的な拠点を確立していたのである。

このようにアル・カーイダ（本体）とその支部との間で戦略とジハードの志向性において少しずつずれが生じつつあった。テロリズムの主体を担っていた各地のアル・カーイダ系集団がグローバルな想像の共同体をめざす運動から、領域的ジハードをめざす運動へと転換したのである<sup>4</sup>。2015年1月7日の「シャルリー・エブド」テロ事件の首謀者が AQAP や「イスラーム国」と関係をもっていたこともジハードのローカル化の方向の一つの事件であるし、何よりもバグダーディーによる「イスラーム国」建設が変化の方向を明確に示している。

### 3. 「イスラーム国」の思想の新しさと既成の秩序否定

「イスラーム国」の主張は従来のイスラーム運動組織と多くの点で異なっている。もっとも注目すべきことは、「イスラーム国」が既存の国際政治秩序・体制を否定したことである。彼らは「サイクス・ピコ体制」<sup>5</sup>を否定し、現在の国境そのものが西欧の陰謀、植民地

支配によって作られたものとみなす。ナイジェリアの「ボコ・ハラム」も預言者ムハンマド時代と同様にイスラームの領域は永遠に拡大し続けるとの考えをもっている<sup>6</sup>。このように既存の国際秩序を否定する点で「イスラーム国」とボコ・ハラムは共通しているのである。

第2の点はカリフ制の復活である。それによれば「イスラーム国」はインドからスペインまでを含む全領域におよび、カリフ位につけるのはクライシュ族の出身者のみである。

第3に「イスラーム国」はシャリーアを厳格に適用しようとしている。シャリーア以外の法（西欧的な近代法を含む）、およびそれによって立つ国家（既存の国家）はすべて否定される。イスラーム教徒にはザカート、キリスト教徒やユダヤ教徒にはジズヤ（人頭税）が課される。捕虜の処置は、①首をはねて殺す、②奴隷にする、③敵の捕虜と交換、または身代金をとって釈放する、④寛大に扱って釈放する、の4つの選択肢から選ばれる<sup>7</sup>。

第4に奴隷制の復活である。2014年10月、イラク北部に住むヤズィード Yazid 派教徒たち（ゾロアスター教、マニ教、キリスト教、スーフイズムなどが混淆した宗教）が奴隷とされた。イスラーム法では、イスラーム世界の外に住む非イスラーム教徒は奴隷にすることが認められている。奴隷制の復活は、キリスト教徒の少女を捕虜とし奴隷として売る、というボコ・ハラムの主張とも共通している。

第5にタクフィール主義は、従来のイスラーム主義運動の急進派でも主張されたことであるが、「イスラーム国」の場合、アメリカなど異教徒の敵対者だけでなく、ムスリム中にも敵対者を見出し、場合によるとムスリムの中の、シーア派教徒を外部の異教徒よりも激しく攻撃する点で特徴的である。

第6に「イスラーム国」に西欧出身者や改宗ムスリムが、多数参加していることである（表1参照）。西欧社会でみじめな生活を強いられているムスリム移民や絶望している若者たちはイスラームの中に「生きることの意味」を見出したのである。

(表 1) シリアの外国人ジハードイストの人数

チュニジア	約 3000 (人)
サウジアラビア	約 2500
モロッコ	約 1500
ロシア	800 人以上
フランス	700
イギリス	500
トルコ	約 400
オーストラリア	250
アルジェリア	200

(出所) 2014 年 9 月 1 日、CNN が発表した Pew Research Center の調査報告を基に筆者作成。

2015 年 1 月、フランスのパリで起こった「シャルリー・エブド事件」の犯人クアシ兄弟がまさにそのような若者である。クアシ兄弟はアルジェリア系移民の子である。サイドとシェリフの二人の祖父は、アルジェリアのアイン・デフラ県生まれのカビール人で、1947 年に労働者としてフランスに移住した。兄弟の父親ムフタール、母親メグレシュ・フリジャはともにフランス生まれであり、従ってクアシ兄弟（兄弟は 5 人。ただし父親は複数人らしい）は移民三世ということになる。二人はもちろんアラビア語はほとんどできず、アルジェリアに行ったことはなかったようである。兄サイドが 1980 年生まれ、弟シェリフが 1982 年生まれで、幼いときに父親がなくなり、母親は生活費を稼ぐために売春婦をしていた。その母親も 1995 年に亡くなり、兄弟は孤児施設に入れられた。極貧の生活と悲惨な家庭環境が彼らの生き方に大きな影響を与えたともいわれる<sup>8</sup>。しかしこうした青年たちは、ジハードの先に具体的な「社会」を描いているわけではなくユートピア主義者とは言えない。

#### 4. 「アラブの春」から「イスラーム国」への道

2011 年 1 月、チュニジアから始まったアラブ・イスラーム諸国の政変は、民主主義や自由を求める市民たちの力により独裁政権を倒し、「アラブの春」と呼ばれた。自由と公正さと人間的尊厳が主張された。

「アラブの春」は自由の壁を突破し、さらに向こうへと突き進んでいった。チュニジアのベン・アリ体制を倒したアラブ政変の主体は、イスラームからは距離をおく、自由や尊厳や平等などの価値を主張する市民であった。宗教としてのイスラームは、強権的で独裁

的な国家統制から切り離され、自由になったのである<sup>9</sup>。しかし、宗教の、強権的な国家からの解放は、極端な世俗派から、逆に過激な原理主義的イスラーム派まで多様な集団を登場させた。あらゆるイスラームが国家の束縛から解放されたという意味でイスラームは「自由」になったのである。2011年以降、チュニジアでは、アンサール・シャリーアを名乗るイスラーム過激派によるテロ事件が頻発した。2011年10月、フランスのアニメ映画「ペルセポリス」を反イスラームだとして放送局ネスマが襲撃され、2012年9月、アメリカでムハンマドを侮辱した映画が上映された、としてアメリカ大使館が襲撃された。さらに二人の左派系政党の党首が暗殺される事件も起こった（2013年2月シュクリー・ベライド、7月ムハンマド・イブラーヒーミー）。他のアラブ諸国、とくにリビア、イエメン、シリア、イラクでは、自由と無秩序とが見分けのつかない混乱状況に陥り、国家は崩壊状態にある。

強権的な国家から解放されたイスラームにおいては、「アラブの春」によって獲得された、多様性や差異を互いに認めるための市民的価値（妥協や合意を得るための市民的価値などもその一つ）が十分に機能していないのである。それが十分に機能するまで長い年月と試練が必要と思われる。今日の混乱状況はまさにその試練なのである。2015年1月、フランス・パリで起こった「シャルリー・エブド」テロ事件もその一つである。「アラブの春」の先駆者チュニジアでは、2014年1月、イスラーム政権「ナフダ党」が自主的に政権を手放し、テクノクラート内閣を作って憲法を改正した。新憲法において、イスラーム諸国ではじめて「改宗の自由（ダミール）」（第6条）が規定されたことは注目すべきことである。また、憲法改正後には、選挙で勝利した世俗派「ニダー・チューニス（チュニジアの呼びかけ）Nida' Tounes」は「ナフダ党」をも連立の中に取り込み、クーデターを巧みに避けつつ、まがりなりにも「アラブの春」がめざす民主的改革を進めている。ところが、そのチュニジアが、シリア（多くは「イスラーム国」に参加）へのハーディストの最大供給国なのである<sup>10</sup>（表1参照）。

また、モロッコも「アラブの春」の優等生である。モロッコは2011年の「アラブの春」の影響を受けた「2月20日運動」と呼ばれる大規模なデモや抗議行動が始まると、国王は先手を打って同年7月1日、憲法を改正し、非常に限定的ではあるが、民主的改革を進めた。とくに、この憲法で、モロッコのアイデンティティの一要素として「ユダヤ性」を認めたことは、イスラームをめぐるしばしば議論される多元性や多宗教・多文化の共存という問題を考えたとき、画期的改革といえる<sup>11</sup>。さらに同年11月の国会議員選挙ではイスラーム政党PJD（公正開発党）が勝利し、イスラーム政権が誕生したばかりか、イスラーム政権下でも2000年代初めから進めている積極的市場開放と自由化によって経済発展に成功し、2014年国民一人当たりの所得は、2000年のそれとくらべて2.6倍も増えているの

である（表2参照）。ところが、そのモロッコから、シリアへのジハーディストの人数は第3番目に多い1500人以上にも達しているのである（表1参照）。

「アラブの春」の優等生であるチュニジアとモロッコから、多数のジハーディストがシリアに赴いているところに、「アラブの春」の意味が隠れているといえる。こうした視点にたてば、「イスラーム国」も「シャルリー・エブド」テロ事件も、「アラブの春」の必然的な「落とし子」ともいえる。それらは、宗教が国家の強権的統制から解放されることによって現れた多様なイスラームの内の、一つの姿なのである。チュニジアの高名な思想家ムハンマド・ターリビーは、「西欧とイスラームの誤解に基づく対立は歴史的に形成されたのであり、それを解決する道は相互の文化変容にある」とし、キリスト教が宗教改革を行ったように、現代に適応するイスラームの宗教改革の必要性を述べている<sup>12</sup>。長い時間をかけた互いの変容であるが、アラブの春がその契機になるかどうかは、即断はできない。

今日のジハーディストたちは、自己破壊的な暴力、ニヒリズム的自殺行為にとり憑かれ、ジハードを唯一の目的としている。文化とは、本質的には歴史とともに変化しうる相対的なものであるはずなのに、彼らの主張において、「文化」の多様性や変容はありえず、「文化」は宗教的アイデンティティ（絶対的な価値）と一体化される。人々が、アイデンティティを主張するや否や、文化を失ってしまうのである。シンボルやコード（規範）に閉じこもることによって、文化を失っているのが今日のジハーディストの姿である。

（表2）モロッコの一人あたりの国民所得

年	1980	1981	1982	1983	1984	1986	1987	1988	1989
	1,087.38	860.41	846.38	747.31	667.68	849.14	914.96	1,059.28	1,065.48
年	1990	1991	1992	1993	1994	1996	1997	1998	1999
	1,199.49	1,264.66	1,281.76	1,183.32	1,314.76	1,541.42	1,364.46	1,440.93	1,407.11
年	2000	2001	2002	2003	2004	2006	2007	2008	2009
	1,300.58	1,308.39	1,384.88	1,687.73	1,908.44	2,151.72	2,439.07	2,850.80	2,884.66
年	2010	2011	2012	2013	2014				
	2,849.85	3,082.34	2,948.88	3,160.27	3,392.27				

単位: US ドル

\*数値は IMF による 2014 年 10 月時点の推計

※SNA(国民経済計算マニュアル)に基づいたデータ。

## 5. 北アフリカ・サハラ地域への「イスラーム国」の影響

### (1) チュニジア

北アフリカ諸国にとって最大の問題は、シリアへのジハーディスト（その多くが「イスラーム国」に加わっているとみられる）の最大の供給国チュニジアに、彼らが帰郷する問題である。イラクにおける戦争が終わっていないのに、なぜ400人ものチュニジア人ジハーディストが戦闘地を去って帰郷したのか<sup>13</sup>。大量のチュニジア人ジハーディストの帰郷は、「イスラーム国」がマグリブに拠点を構築する意図をもって彼らを帰郷させた、という可能性も考えておく必要がある。

チュニジアの南部はアンサール・シャリーアの拠点であり、「イスラーム国」が浸透しやすい政治地理的環境にあり、さらにリビアからアルジェリア南部が共通の思想潮流をもった急進派の接点になっている<sup>14</sup>。チュニジアからシリアへのジハーディストは最大の人數（2500人～3000人）であるだけでなく、シリアに行こうとして止められた者が9000人にも達することである（注10を参照）。これらのことを考えればチュニジアの安定化が順調に進むと見るのは危険である<sup>15</sup>。

### (2) アルジェリア

2014年9月23日、フランス人エルベ・グルデル Herve Gourdel がアルジェリア・ティズイ県で誘拐され、斬首された。犯人たちは「カリフの兵士たち Jund al-khilafa」という組織を名乗ったが、斬首のビデオを流した後に全く姿を消してしまったことから、彼らが「イスラーム国」と直接的に結びついていたかどうか疑わしかった。しかし、その後、「イスラーム国」の影響がアルジェリアにも及ぶようになったのは明らかである。2014年12月20日、ブーメルデス県（アルジェから東50km）で「カリフの兵士たち」のメンバーとみられる3名がアルジェリア治安軍によって殺害され<sup>16</sup>、さらに、2015年1月末から2月初めにかけて南部で4人のテロリストが同様にアルジェリア治安軍によって殺害された<sup>17</sup>。アルジェリアの憲兵隊からの情報によれば、2014年の1月～10月までの統計で、20都市で38人のテロリストが掃討された。これらのテロリストがリビアの「イスラーム国」とつながりを持っているとも言われるが、実態は不明である。

### (3) リビア

「イスラーム国」の勢力（影響）がリビアに及んでいることはほぼ間違いない。その一派はリビアの武装集団同士の対立や政治党派の弱体化や治安の悪化などを利用し、東部ダルナを支配したと主張している<sup>18</sup>。

「リビアのイスラーム国」は 2015 年 2 月 15 日、エジプト人コプト教徒の出稼ぎ者 21 人を誘拐し、「イスラーム国」の処刑方式に従い、捕虜にオレンジ色の服を着せ、斬首するビデオを「イスラーム国」のメディアで流したのである<sup>19</sup>。テロリストたちはリビアにおける「イスラーム国」の存在をアピールしようとしたのである。

翌 16 日、エジプトが報復としてリビアを空爆した<sup>20</sup>。しかし、20 日には、リビア東部デルナ Darna の西 30km に位置するクッバ Qubba で、ガソリンスタンドを狙った自動車爆弾テロ事件が起き、45 人が死亡した<sup>21</sup>。これには「イスラーム国」の分派による犯行声明が出された。その実態はともかくリビアのジハーディストの活動が「イスラーム国」とのつながりを強めていることは確かである。

2011 年の「アラブ政変」によってカダフィー体制が崩壊した後、リビアの政治は不安定な状況が続き、現在では二つの武装勢力に分断されている。一つは、ハリーファ・ハフタル将軍が率いる一派でリビア国民軍と呼ばれる。国際社会が認めるリビア代表議会（2014 年 5 月、トリポリが「リビアの夜明け Fajr Libya」に占領されたため国民議会は東部トブルクに移転）はトブルクに置かれているが、ハフタル将軍はこの代表議会の支持を得ている。主体は革命後の民兵や、カダフィー政権の元軍人などで、宗教的には世俗的であるといわれる。その拠点は東部にある。

もう一つが、「リビアの夜明け」で ミスラタ出身の民兵、多様な潮流のイスラミスト集団から構成され、トリポリとミスラタを拠点としている。トリポリには代表議회를離脱した議員がトブルク政府に対抗して独自の議会を開設し、「リビアの夜明け」を支持している。

これらの二つの武装勢力（二つの政府）とは別に、ベンガジにはアル・カーイダに近い、アンサール・シャリーアというジハーディスト集団が存在する。さらに、2014 年 11 月、ダルナに拠点を置くジハーディストたちが「イスラーム青年諮問評議会 Majlis Shura shabab al-Islam」の設立を宣言、この組織が「イスラーム国」への忠誠を誓うことで「リビアのイスラーム国」が誕生した。「リビアのイスラーム国」はリビアを三つの県 Wilaya、すなわちトリポリ県、キレナイカ県、ワッザーン県に区分することを宣言し、さらに 12 月、リビア東部に軍事訓練基地を設置したともいわれる<sup>22</sup>。リビアが「イスラーム国」のあらたな拠点になることを危惧する声は少なくない<sup>23</sup>。

では、アル・カーイダに近いといわれたアンサール・シャリーアが勢力基盤を築いていた東部地方で「イスラーム国」はいかにして拠点を築くことができたのか。アンサール・シャリーアが「イスラーム国」に移ることで（2014 年 10 月忠誠の誓）、アル・カーイダと「イスラーム国」の連合が形成された、と考えることもできるが、この判断の是非にはなお状況を見極める必要がある。

## 6. 「イスラーム国」のイデオロギー的拡散とその脅威

「イスラーム国」の勢いはイデオロギーの伝染、ないしは模倣という形で雪崩を打つように拡大している。アルジェリアでは AQMI の司令部はもはや存在せず、いまや AQMI の指導者アブディルマリク・ドゥクデル Abdelmalek Droukdel の命令に従う集団はいなくなった<sup>24</sup>。それぞれの集団は独自に戦略と目的を決めている。その結果、2014 年 9 月初め、まったく無名の一集団が“カリフの兵士たち”という名のもとに、バグダーディーに完全に忠誠を誓ったのである。リーダーのアブディルマリク・グーリー Abdelmalek Gouri は、AQMI のメンバーの一人で、その集団はせいぜい 15 人程度であった。しかし、すでにほぼ全員がアルジェリア軍によって殺害されていて、彼らは取るにたりない集団としてみなされている。そのため、アルジェリアのテロリズムは完全に根こそぎにされ、いまやサーヘル地域や山岳地でごく弱々しい活動をする程度の力しか持っていないと思われる。

しかし、ことはそれほど単純ではなさそうである。アルジェリアには AQMI に近いメンバーが各地に残存し、また経済や社会への不満を抱くジハーディスト予備軍は多く、彼らが「イスラーム国」に加わり、バグダーディーの指示に従えば、数千人の集団を形成する可能性があるからである<sup>25</sup>。

わずか数か月のうちに、ジハーディストの波は怒涛のごとくイスラーム世界全体に広がった。2014 年 6 月、モロッコ治安軍はバグダーディーのグループと結びついたいくつかの細胞を破壊した。「アラブ政変」をうまく乗り切ったモロッコから多数のジハード兵士がシリアに赴いていることは既に述べたが（表 1 参照）、さらに、2000 人以上のモロッコ人戦闘員がヨーロッパに渡ってジハーディストに参加する準備をしていた、との報告もある。これらの諸問題と、チュニジアで 2015 年 3 月 18 日、テロが起こったことを考え合わせると、モロッコでテロの危険性が小さい、と断定はできない。

チュニジアは、常に穏健な国である、と言われ、「アラブの春」の唯一の成功国である、とみなされてきた。しかし、その国が、シリアへの最大のジハード供給国なのである。チュニジアのアンサール・シャリーアは正式にはバグダーディーに忠誠を誓っていないが、「イスラーム国」への支持を表明している。

「イスラーム国」の中にリビア人兵士が多数いることは疑いない。「イスラーム国」のリビア人兵士は 2014 年夏、シリアを去り、一時的に、ベンガジに拠点を置いていたリビアのアンサール・シャリーアの兵士として戦闘に加わった。彼らが一時的にリビアに戻ったのは、同国人を、「イスラーム国」に戦闘員としてリクルートする目的であった、と考えることもできる<sup>26</sup>。かくして、同年 10 月になるや、リビアのアンサール・シャリーアがバグダーディーに正式に忠誠の誓いをした。

リビア東部、エジプト国境に近いデルナでは、リビアのアンサール・シャリーアよりも、数日早く、「イスラーム国」のカリフに忠誠を誓った「イスラーム青年諮問評議会」が地域を支配している。この超過激派集団は公開処刑を行い、またシャリーアを厳格に執行している。こうしてリビアの東部全体に「イスラーム国」の権威が及ぶ地域になったのである。

ビンラーデンは、アル・カーイダに領土を与えようとはしなかった。これに対し、「イスラーム国」は領土と国民をもった権力を主張している。「イスラーム国」はアル・カーイダよりもその意味では危険である。そのイデオロギーが伝染、模倣され、各地域に拠点が築かれることによって、その運動が地域勢力に変わる危険性があるからである<sup>27</sup>。実際にナイジェリアのボコ・ハラムにはその影響がみられる<sup>28</sup>。

## おわりに

イスラーム諸地域のジハードイスト集団が、続々と「イスラーム国」に結集している。パキスタンのターリバーン系諸集団（Tarik al-Khilafa が 2014 年 7 月 10 日、Tarik al-Taliban が 2014 年 10 月 3 日）やフィリピンのアブ・サヤフ Abu Sayyaf 部隊（2014 年 8 月 15 日）が「イスラーム国」に忠誠を表明した。アル・カーイダの影響力が揺らいでいるのは確かである。イエメン地域はアル・カーイダのもっとも強い勢力が存在していたところである。ところが、2014 年 8 月 20 日、AQPA（アラビア半島のアル・カーイダ）は、「イスラーム国」のカリフに、忠誠ではないが、支持を表明した。カリフの信徒たちへの、AQPA の「連帯」の表明として、「彼らの血と彼らの傷は、我々のものである」との声明が発表された。

AQPA は正式にはバグダーディーに忠誠を誓っていないが、2014 年 8 月 9 日、「イスラーム国」の処刑方法をまねて、14 人のイエメン兵士の首をはね、インターネット・サイトでその映像を公開した。このグループは、自らのファンクラブを失うのを避けるために、バグダーディーの処刑法を真似たのである。アル・カーイダに忠実な集団の中に、「イスラーム国」の影響が及んでいるのである。イスラ戦線から「イスラーム国」へと移る兵士もいる。

ヨーロッパ人の兵士たちにとっては、国境を主張しない「イスラーム国」は魅力的である。「イスラーム国」は特定の国籍を要求しないからである。

2015 年 3 月 7 日、ナイジェリアのボコ・ハラムは指導者アブバカル・シエカウの音声メッセージを流し、「イスラーム国」への忠誠を正式に表明した<sup>29</sup>。ソマリアのシャバーブ Shabab は、アル・カーイダに属しているが、そのメンバーは大挙して「イスラーム国」に加わったといわれる。すべてのサラフィスト運動にとって、カリフに忠誠を誓うことは、生き残りの問題になっている。各地の急進派組織のカリフ国への忠誠が雪崩を打って進んでいる。それは、アル・カーイダの存在をも脅かしている。「イスラーム国」の勢力拡大は

アル・カーイダを従属的な地位にしかねない勢いである。アル・カーイダがもし「イスラーム国」のカリフに忠誠を誓ったら、それは決定的になるだろう。

最後にテロリズムの脅威と地域社会の安定化・不安定化という観点から、北アフリカ（マグリブ）とサハラ・サーヘル地域について言及をしておきたい。1990年代からこの地域でテロ活動を行っていたのは、アルジェリアのGIA（イスラーム武装運動）とその流れをくむGSPC（宣教と戦闘のためのサラフィー主義者集団）、およびAQMI（GSPCが2007年1月正式改称）であった。2000年代に入ってアルジェリアでのテロ対策の強化と治安の改善とともに、AQMIの活動はモーリタニアへ、さらにマリからニジェールへと拠点を移した。彼らの活動が南から北上する形で起こったのが、2013年1月アルジェリアのサハラ砂漠でのイナメナス・テロ事件である。

しかし、その後、「イスラーム国」の台頭とともにAQMIがテロの主役から降りたようにも見える。ただし、このような見方はいくつか留保条件をつけておく必要がある。第一に、「イスラーム国」への結集は、ある種のブランド力（ファンを魅了する力）によるものではないのか。だとすれば、ビンラーデン時代のアル・カーイダの結集力と同じ性格ということになる。多数の急進派小集団は自分に有利な方に容易に移るのである。アル・カーイダのブランド力が復活すれば、そちらに戻るかもしれない。第二に、地域に根差そうとする「イスラーム国」の戦略（イデオロギー）は地域的政治権力を築く可能性があるものでより危険なのであるが、逆にそれは既存の国家権力と衝突することになり短命で終わる可能性もある。第三に、北アフリカ最大の不安定要因はリビアであり、石油・天然ガスを有するリビアの「国家崩壊」的状況はカダフィー政権を打倒した時と同様に国際的軍事介入を招くかもしれない。このような点を総合的に考えると、北アフリカ（マグリブ）とサハラ・サーヘル地域における、イスラーム急進派の主役が、AQMIから「イスラーム国」に変わった、と断定するのは時期尚早であろう<sup>30</sup>。

#### —注—

<sup>1</sup> Olivier Roy, “Le Jihad est aujourd’hui la seule cause sur le marche,” *Libération, Monde*, Octobre 03, 2014.

<sup>2</sup> 欧米やアラブ諸国から、若い女性が多数、「イスラーム国」に加わるのは、兵士の妻となるためである、とも言われる。しかし、このような現象は、別の意味では、「アラブの春」を契機に始まっているイスラームの変化、あるいはイスラームの危機を示しているのかもしれない。

<sup>3</sup> 保坂修司『正体 オサマ・ビンラディンの半生と聖戦』朝日新聞社、2001年、50-51頁。

<sup>4</sup> Patrick Cockburn, *Le retour des djihadistes*, (Paris, Equateurs, 2014), p.15.

<sup>5</sup> 1916年、オスマン帝国領を分割するためイギリス、フランス、ロシアの間で結ばれた秘密協定。

<sup>6</sup> Valérie Thorin, “Boko Haram, un Etat dans l’Etat ?”, *afrique asie*, février, 2015, p.18. なおボコ・ハラムもカリフ制や奴隷制の復活、シャリーアの施行、タクフィール主義などを主張しており、「イスラーム国」の主張と共通している。

- <sup>7</sup> 保坂修司「『イスラーム国』とアルカーイダ」吉岡明子・山尾大（編）『『イスラーム国』の脅威とイラク』岩波書店、2014年、233頁。
- <sup>8</sup> *Reporterre, le quotidien de l'écologie*, janvier 15, 2015 : <http://reporterre.net/L-enfance-miserable-des-freres>.
- <sup>9</sup> 革命後の新憲法（2014年1月26日議会で承認された）では、チュニジア憲政史上はじめて、宗教を変える自由（*Damir*）が認められた（第6条）。イスラーム諸国の憲法で、宗教を変える自由が認められたのは初めてと思われる。
- <sup>10</sup> チュニジア内務省が認めた情報（*al-khabar*, Novembre 29, 2014）によれば、2013年3月から2014年11月までの間にシリアに出かけたチュニジア人ジハーディストは2500人～3000人もの数になる。さらに無視できないことは、その他にシリアへの渡航を止められた者が9000人近くもいたことである。なお *Financial Times* (Novembre 02, 2014)によれば、シリアへの渡航を制止されたジハーディストは8000人である。
- <sup>11</sup> 2011年新憲法では、国王の権限を縮小（旧憲法では首相の任免権は国王にあったが、新憲法では第一党から選出と明記など）するなど一定の民主的改革がすすめられたが、多元性や多宗教・多文化の共存という問題を考えたとき、アイデンティティの一つにユダヤ性を入れたことはもっとも注目すべきことである。おそらくイスラーム諸国家のなかで初めてであろう。「モロッコ王国の統一性はその構成要素の全てが一体となった統一性である。すなわち、それらは、アラブ・イスラーム的、アマジグ的、ハッサーニーヤ・サハラの構成要素が一体となり、さらにそれらに加えて、アフリカの、アンダルシア的、ユダヤ的（*ibriyya*）、地中海的支要素によって豊かにされている。」（2011年憲法の前文）
- <sup>12</sup> Mohamed Talbi, “Islam et Occident-Les possibilités et les conditions d’une meilleure compréhension”, *Les Cahiers de Tunisie*, t.38, no.141-142, 1987, pp.5-46.
- <sup>13</sup> チュニジアの内相 Lutfi Jeddou は、2014年3月には、およそ400人のジハーディストがシリアからチュニジアに帰国したことを認めている。“Le retour des terroristes tunisiens de la Syrie suscite des craintes en Tunisie”, *panapress.com*, mars 08, 2014.
- <sup>14</sup> “Tunisie : qui sont les terroristes ?”, *Jeune Afrique*, Septembre 02, 2014.
- <sup>15</sup> はからずもこうした危惧が現実のものとなってしまった。2015年3月18日、チュニスのバルドー博物館がテロリストに襲撃され、日本人3人を含む21人が犠牲となった（その他に犯人2人が殺害された）。アンサール・シャリーアによる犯行とみられている。『朝日新聞』2015年3月20日。
- <sup>16</sup> *al-Hayat*, December 22, 2014.
- <sup>17</sup> 報道では「イスラーム国」を支持するテロリストであるとされる。*al-Hayat*, December 22, 2014.
- <sup>18</sup> “En Libye, L’Etat islamique affirme peu à peu sa présence”, *Le monde*, février 11, 2015.
- <sup>19</sup> *Le monde*, février 15, 2015.
- <sup>20</sup> *Les Echos FR*, février 16, 2015.
- <sup>21</sup> *shemsfm.net*, février 21, 2015.
- <sup>22</sup> Patrick Markey and Michael Georgy, “Islamic State lays claim to North African outpost,” *Reuters*, February 18, 2015.
- <sup>23</sup> “La Libye est devenue un ‘hub’ terroriste,” *L’Expression*, décembre 29, 2014.
- <sup>24</sup> Samuel Laurent, *L’Etat islamique*, (Paris, Editions du Seuil, 2014), p.139.
- <sup>25</sup> *Ibid.*, p.140.
- <sup>26</sup> *Ibid.*, pp.141-142.
- <sup>27</sup> Olivier Roy, “Les jeunes djihadistes sont des suicidaires”, *L’express*, Novembre 03, 2014,
- <sup>28</sup> 2015年3月3日、「ボコ・ハラム」は、「イスラーム国」を模倣した処刑映像を公開した。  
<http://www.i24news.tv/fr/actu/international/afrique/63149-150304-boko-haram-publie-une-decapitation-sur-le-modele-de-l-ei>
- <sup>29</sup> *AFP*, March 03, 2015.  
<http://www.dailymail.co.uk/wires/afp/article-2984458/Boko-Haram-leader-pledges-allegiance-Islamic-State-group-message.html>
- <sup>30</sup> 実際に2013年11月6日、マリ北部 Kidal でフランス人ジャーナリスト(RFI)2人がAQMIに誘拐、殺害された(RFI novembre 06, 2013.)。また2014年3月6日にはマリ北部でフランス軍とAQMIが武力衝突をしている。  
さらに2015年3月6日または7日、マリのバマコで西欧人が利用するレストランがムラービトゥーン Al-Mourabitoun という集団によって襲撃され、5人（マリ人3人、フランス人1人、ベルギー人1人）が殺害された。この集団はムフタル・ベルムフタルの指揮下にあるとされ、少なくとも「イスラーム国」よりもAQMIに近いと思われる(RFI, mars 08, 2015.)。